

「生きること」

情報通信工学科 2 年 吉野 彩

中学の頃にひどい「いじめ」を受け、登校拒否になり、ついには自殺未遂にまで追い込まれた、大平さんのそれまでの心境と、それから後の生きざまが、私達に生きすることを考えさせてくれます。人間とはなんと弱く、そして強い生き物なののでしょうか。そして、生きるとはなんとつらく、そして素晴らしいことなののでしょうか。私はこの本を読み始めて、30分も経たないうちに涙があふれて止まらなくなりました。自分の心の奥の傷に触れてしまったような気がして、とても悲しくなったのです。忘れかけていたあの頃の自分の姿が、まざまざと思い出され、作者の悔しさや悲しみとピッタリ重なり合って、再び私に襲いかかってくるようでした。

私が一番つらかった時期は小学校の六年生になったばかりの時でした。仲のよかったあの一の子と喧嘩をしたのです。その子は、私のクラスのリーダー的な存在でした。始めのうちはその子が私を無視してくるだけだったのですが、だんだんとまわりの友達も私のことを無視してくるようになったのです。そして気付けば私はひとりぼっちになっていました。つまり「いじめ」にあってしまっていたのです。しかし私は泣き虫な性格だったため、言いたいことも言えずに、何も抵抗できなくて、誰を信用して相談すればいいのかも分からない状態でした。一人違う世界に追いやられているような孤独感で、思い込みが激しくなり、自分がとてもみじめになりました。「いじめ」を受ける側は、人間性そのものを否定され、周りの人からは気付かれないうちで、とても恐ろしい判断をすることがあります。大平さんのように自殺をはかったり、今度は「いじめ」をする側にまわったりするのです。私自身、一時期は学校の帰り道、一人でいろんな事を考えていました。親に相談する事はとても情けないと思い、できませんでした。帰る途中、ずっと泣きはらした目でも、玄関の前ではいつもの笑顔をつくりました。死んでしまいたいと思った事もありましたが、私には怖くてできませんでした。きっとこの本の作者の割腹は、自分一人ではどうすることもできない空しさと、裏切ったクラスメイトに対する怒りの表れだと思いました。

学校の中で「いじめ」を受けて、悩んで、孤独を感じて「死」まで考えようとするのは、大人社会では理解されないかもしれません。けれど、まだ幼い子供にとって、あの教室の世界で「いじめ」を受けることは、言いようのない苦痛であり、頭の中が毎日そのことでいっぱいになるのです。物事を冷静に考えることも出来にくくなります。しかし、やはりいつかは自分が乗り越えて、強く生きられる自分に変わらなければならない部分もあるのです。私がつらい状況から抜け出せたのは、なんとといっても、当時所属していたミニバスケットボールクラブのおかげです。一日の中で唯一の楽しみがバスケットをすることでした。チームは決して強くはなかったですが、そこにいた仲間は、本当に最高でした。私にはこのチームでの活動があったからこそ、自分の存在を自分でしっかりと感じる事が

でき始めたのだと思います。そして、自分の居場所を見つけることで、強くなることができました。人間にとってひとりぼっちであると感じることほど、耐え難いことはありません。実際に、自分の居場所、心の拠り所を失ってしまったら・・・それは、何物にも勝る苦痛です。

作者も、自殺未遂以後、非行に非行を重ねながら、ひたすら自分の居場所をどこかに求めていたのでしょう。そうして、私と同じように、自分の存在価値を自分で認めることができた時、大きな自信と目標が生まれてきたのです。

現在、大平さんは弁護士として個々の弁護活動に励むかたわら、自らの体験を明らかにすることにより、多くの青少年を救おうと講演活動や、アドバイザーとしての執筆活動にも時間を費やしています。いくら立ち直ったとはいえ、あまりにも悲惨な過去の体験を、世に明かすことには大きな抵抗があったに違いありません。敢えて、それを成した大平さんの深い思いが、私にもひしひしと伝わってきます。

この本は、様々な形で私に、「生きること」を考えさせてくれました。思うようにならない焦りやいら立ちは、往々にして外に向けられがちですが、実際は自分が変われば周りの環境も自然と変わり、全ては自分次第だと感じます。そして「いじめ」は他人の人生を狂わす大きな問題です。一人一人が前向きに生きて、他人の心も理解できる優しさと勇気を忘れないこと、そして何よりも自分の人生を諦めないことが大切だと思います。

『だから、あなたも生きぬいて』 大平 光代著 講談社